月刊
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成19年2月1日発行　第31巻第2号通巻第353号

みんぱく

国立民族学博物館
2007
2

特集　災害

エッセイ

世界へ 世界から

大阪と東京の考現学

正高信男

まさたか のぶお／1954年生まれ。大阪府出身。大阪大学大学院人間科学研究科修了。現在、京都大学霊長類研究所教授。専攻は比較行動学。主著に『いじめを許す心理』『育児と日本人』（岩波書店）『ケータイを持ったサル』『考えないヒト』『老いはこうしてつくられる』（中央公論新社）などがある。

愛知県に在住して、足かけ一五年になる。東京や大阪へ出かけるのは、出張のとき。その際、ＪＲ東海道本線や山手線、大阪環状線を利用する折には、必ず乗客をウォッチングするように心がけている。あるころから、ふと気がついた事実があるからだ。

車中で活字に目をとおしている人の占める比率を、乗車するたびに計算してみると、ほとんどいつも東京の方が、値が大きいのである。雑誌や本を比較的よく読んでいる。

大阪は、多くが新聞、それもスポーツ紙やタブロイド夕刊紙が多い。重い単行本となると、かなり稀なのだ。時間帯や、場所を移してもおおよそ、東京は大阪の一・五倍は「活字人口」が多い勘定となる。

むろん、ケータイメールの普及で事情は若干変わってきたのも事実。以前よりも、活字人間の絶対数が減少した。けれど、メールをしている乗客自体の数も、やはり東京は大阪を大きく上回る。さらに数百人規模で、日本語の語彙数や読める漢字の数を両地域で個人ごとに測ってみるとなんと、やはり東京の方がはじき出される数値が大きいことが明らかとなったのだ！

これを、どう解釈すべきかと頭を悩ませている。

まず大阪に好意的な解釈。――関西はもともと話し聞く文化なのに対し、関東は読み書く文化。その違いが出ているというもの。蛇足であるが、わたし自身は大阪の住吉という下町の育ちである。

次は個人的には悲しいけれども別の解釈。――日本は一極集中がたいへん進んでしまった。とりわけ関西の地盤沈下には、目に余るものがある。そして、それは経済ばかりか、文化面にもおよぶに至った。あげくのはてに、知的格差が顕著化したと見る考えが成り立つ。

どちらが妥当なのだろう？

とりあえず東京と大阪以外の街でも、同じ観察をすることが必要かもしれない。因みにわたしの暮らす名古屋近郊は、東京タイプに属する。では、福岡や札幌などではどうなのかと思うものの、まだ検証するチャンスがないままでいる。

誰か協力してくれる人は、いないものだろうか。

文化人類学や民族学といっても、遠いところへ出かければいいというものではないだろう。もっと足もとを見つめ直しませんか。

月刊 みんぱく

目次

FEBRUARY 2007
月刊みんぱく 2

01 エッセイ 世界へ世界から
大阪と東京の考現学
正高 信男

02 特集 災害
現代の地球環境と自然災害
石 弘之
災害をとおした本来の民俗学とは
森栗 茂一
災害とエスノグラフィー調査
林 勲男
被災者と角突き牛との絆
菅 豊
助けを求められない「グージャル」
子島 進
援助の功罪
杉本 良男

08 未来へひらくミュージアム
美術作家が見た美術館
白川 昌生

11 表紙モノ語り
カラジャ人形
中牧 弘允

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
変わらぬ村、変わる人びと
熊谷 圭知

15 人生は決まり文句で
コーラの実をもたらす者は、人生をもたらす
松本 尚之

16 外国人として生きる
日本に夢を託すマリ人
後藤 由佳

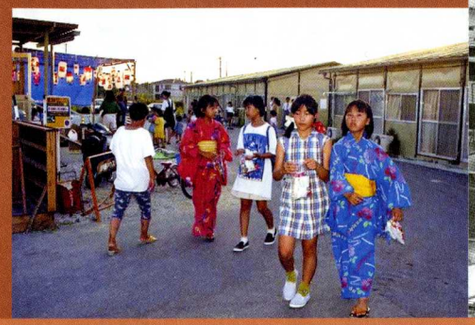
18 地球を集める
レプリカで表現する
印東 道子

20 生きもの博物誌
バナナの食べ方
小松 かおり

22 フィールドで考える
「縁」のある建築
岩城 考信

24 開館三十周年記念事業 みんぱく公開講演会
「日本で暮らす―移民の知恵と活力」
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ



特集 災害

二一世紀になり、世界各地で増える災害の数々。
それは肉体的な面でも精神的な面でも、
人びとに大きな影響をおよぼす。
人びとは苦難からいかに立ちなおったか。
周囲からの援助のあり方はどうだったか。
そして災害に対し、文化人類学、民俗学は
どうかかわっていくべきかを、この特集で考えてみたい。

現代の地球環境と自然災害

石 弘之
（いし ひろゆき）
北海道大学特任教授

事象と被害の区別

二〇〇四年一二月のインド洋大津波を皮切りに、二〇〇五年八月のハリケーン・カトリーナの米国上陸、同一〇月のインド・パキスタン大地震とハリケーン・スタンの中米襲来など、大きな被害を伴う自然災害が立て続けに起きた。何百万人という人びとが被災し、「地球の異変では」という恐怖が世界に広がった。

二〇〇五年一月に神戸市で開かれた国連防災会議の席上でも、一九九四～二〇〇三年の一〇年間に世界の自然災害の発生件数は二五〇〇件以上、二億人以上の人が洪水、地震、ハリケーンなどの自然災害の被害に遭ったという報告があった。これは、それ以前の二度の一〇年間の数字を六〇パーセントも上回っている。この数字を鵜呑みにすると、災害は激増していることになる。

災害に関しても数々の名文句を残した物理学者で随筆家の寺田寅彦氏は、「『地震の現象』と『地震による災害』とは区別して考えなければならない」と書いている。災害を引き起こす現象、つまり「原因事象」(Hazard)の発生頻度を調べた研究によると、地表一万平方キロメートルあたり年間〇・三件前後で、過去数十年ほとんど変わっていない。つまり、問題は地震や台風の「件数」が増えていることではなく、災害に巻き込まれて被災する「被害」(Disaster)が増えていることにある。

災害を扱う国際機関は、①一〇人以上の死亡　②一〇〇人以上の被災　③国家非常事態宣言の発令　④国際救援の要請、のどれかの条件を満たさない限り、自然災害としてデータベースに登録しない。いくら大地震が南極の内陸部で発生しても、被害がなければ「事象」にすぎない。

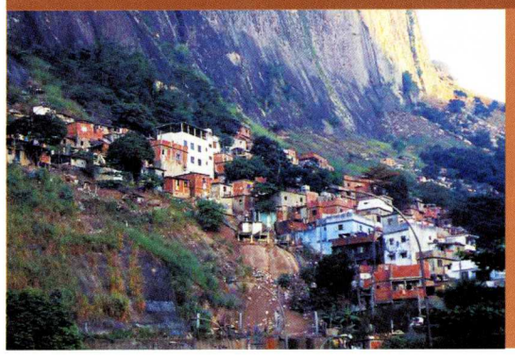
人間側の責任

これだけ、被害が増大しているのは、自然側ではなく、人間側に責任があることはいうまでもない。サンゴ礁隆起の痕跡などから、約二四〇年前にもスマトラ島沖で巨大地震が発生して大津波が起きたことがわかっている。だが、その被害の記録はなく、あったとしても海岸際に住む住民の数は少なく、被害に遭った人もきわめて限られていたのに違いない。

ところが、過去数十年の人口急増で、危険な高潮地帯や湿地帯、崖（がけ）崩れの起きやすい急斜面や干ばつがひんぱんに襲うような乾燥地帯に、多くの人びと、とくに貧しい人たちが住まざるをえなくなっている。さらに、森林伐採や乱開発など環境破壊が、以前なら軽微だった被害を大きくしている。

近年の災害被災者の九五パーセントまでが貧しい途上国の住民であることが、こうした状況を雄弁にものがたっている。じつは、自然災害は人災であり環境破壊が引き金だったのだ。

高潮地帯のスラム。台風で真っ先に被害を受ける（マニラ近郊）



崖っぷちに建っている集落。地すべりが起きればたちまち崩れ落ちる（リオデジャネイロ）

特集 災害

災害をとおした本来の民俗学とは

森栗 茂一
（もりくり しげかず）
大阪外国語大学教授

修学旅行での体験プログラム。震災の記憶をパン屋さんから伺う（神戸市長田区丸五市場）

復興住宅の高齢者の声がきっかけとなって開通した住吉台くるくるバス。子ども駅長が運転手に花束贈呈

阪神大震災で見たもの

関東大震災では、考現学の今和次郎がスケッチを残した。阪神大震災では、都市計画、法、経済、社会学者の市民連帯的研究はあったが、文化人類学者の関心はほとんどなく、震災を記録し、関与し、世のため人のため（柳田國男が主張した民俗学）に動くことなど思いもよらなかった。

唯一、神戸在住のわたしは阪神大震災で動いた。わたしが見たものは、独居高齢者が避難所で居場所を失い、死んでいく姿。郊外遊休地の仮設住宅における、厳しいが故にささえ合う暮らし。住みなれたまちへの思慕と断念。自立的なまちづくりの動き。そのなかで、ジャーナリスト、事業家、行政マン、プランナー、それに一部の学者らとNPO神戸まちづくり研究所を設立した。

一〇年経って何が見えてきたか

行政が「震災の教訓」をいくら吹聴しても、安心・安全まちづくり、地域で日常をささえ合う福祉は困難である。そもそも、男も女も遠方で働き、クルマで移動しコンビニで個別消費する。ボランタリーなまちづくり活動は、一部の退職市民がにない、特定集団化し、そして高齢化する。復興基金がとだえる五年目、震災のささえ合う記憶からうまれたNPOやボランティア活動は、ばたばたと消えた。

わたしは、暮らし方を変えねば震災の教訓など残らないと思う。

復興公営住宅では、四〇パーセントの超高齢化、重厚長大産業の衰退・移転、ボランティア活動といった今日の日本の現状を神戸は震災で一〇年先に体験した。これに関与し観察してきたわたしは、以下の課題を認識している。

①コミュニティ活動をしようにも、市民のコミュニケーション能力が減退し、コーディネーターが不足。また、そのマネージメント能力が欠如している。

②①の原因は、クルマを中心とした個別消費にある。高齢化に対して、クルマに頼りすぎない暮らしをどうつくるのか。

③地域の産業や暮らし、災害の記憶を住民が案内する「まちあるき」を、住民全体で展開する必要がある。

災害から学ぶ

この間にも、世界各地で大災害がおき防災研究は進展した。この流れのなかで、文化人類学においても、災害の人類学が展開されている。

しかし、今や住民協働型交通まちづくりに忙しい元民俗学者のわたしは自問する。災害で（を材料に）災害民俗学がしたかったのか。いや、違う。

災害そのものを研究し、民俗学の視点に立った防災まちづくりをしたかったのか。震災の記憶、防災活動を修学旅行で体験するプログラムは、そうした活動かもしれない。しかし、それが目的ではない。

わたしは、災害をきっかけに時代の生き方を模索する人びとから学び、持続可能な社会を考えてきた。

災害をきっかけに、現場を流浪し思考してきたが、民俗学とは、本来、そういうものではなかったかと、元民俗学者は煩悶（はん もん）しているのである。

災害とエスノグラフィー調査

林 勲男
（はやし いさお）
本館民族社会研究部

インド洋地震津波災害

二〇〇四年一二月にインド洋沿岸のほぼ全域を襲った津波は、この地域を研究する者に大きな衝撃を与えた。調査地やテーマの変更を余儀なくされたり、その後の調査でさまざまな問題に直面した研究者も少なくない。

わたしは、一九九八年のパプアニューギニア津波被災地調査や、フィリピンのマニラでの地震防災プロジェクトをとおして、さまざまな専門性をもつ災害・防災の研究者たちとすでに共同研究活動をおこなっていた。その経緯から、インド洋地震津波災害では、現地に詳しい研究者を派遣するためのコーディネーターの役割を担った。研究者への調査依頼や、文科省その他の機関との調整など、わたしの冬休みはほぼすべて、この仕事に費やされた。

ナイーブな人類学者

建築学をバックグラウンドとする防災学者から、「人類学者はナイーブである」と言われたことがある。どういうことかと聞いてみると、工学出身者は研究あるいは調査の名のもとに、それ以前にはまったく面識の無い人の家にも臆面（おくめん）もなく入っていき、建物の構造や家具の配置を調べるだけでなく、その家庭の経済状況までも聞きだす。ある人類学者に「よく、そんなことができるなぁ」と呆れられたそうだ。彼にとって人類学者の調査は、インタビューがなかなか核心部分にいかず、世間話のような時間がやたら長く感じられるのだろう。海外での調査経験も多く、学生時代はインドネシアのある島で長期滞在調査をした経験もある彼ですらこうであるから、効率性を重視した緊急調査しか経験のない他の防災学者にとっての、人類学のフィールドワークに対するイメージは推測に難くない。

ならば、インド洋地震津波災害発生から一、二ヵ月後に、単なる現地ガイドや通訳としてではなく、「ナイーブな人類学者」に社会調査者として何が期待されたのであろうか。

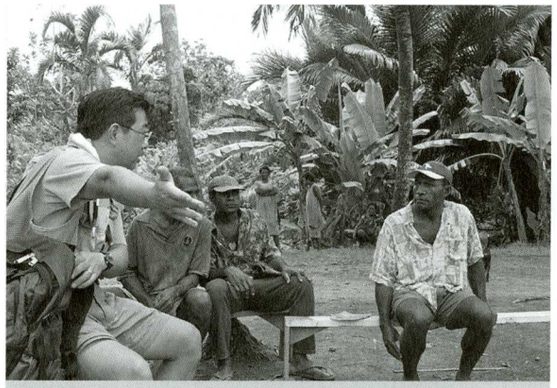
いうまでもなく、人類学のフィールドワークは、人びとの生活世界に参与することによって、彼らについての知識をえていく。それは決して一方向的な知識・情報の流れではなく、権力関係を含んだ複雑な人間関係に身をおきながらの実践である。

日本では、阪神淡路大震災以降、被災者ばかりでなく消防や行政などの対応従事者も含めて、災害の体験をできる限り具体的に調査することが試みられ、その方法と成果がエスノグラフィー（民族誌）の名でよばれている。人類学への関心も決して低くはない。

エスノグラフィー

インド洋地震津波災害の調査は、短期間で実施し、報告書にまとめなければならないという制約があり、おもに被災地住民、行政、救援組織の活動についての相互関係に着目した調査となった。しかし、その後の復旧・復興支援も含めた「災害」という出来事を、人びとはそれぞれの社会的な役割のなかでいかに経験したのか、それが政治・経済や文化にどのような変化をもたらしたのか、当初の強行スケジュール調査に携わった人類学者たちによる持続的な努力は今も続いている。

生活世界に入り込んだ継続調査によって、社会現象としての災害の変化をとらえることこそ、他分野の研究者たちとともに、災害・防災研究をさらに深化させることであり、あのときも、そして今も期待されている。もちろん、「ナイーブさ」を重視しながら。



津波災害からの生活再建について話を聞く（パプアニューギニア）

昭和南海道地震（1946年）の津波到達点には、次の津波に備え、避難タワーが設置された（和歌山県串本町）

特集 災害

特集 災害

被災者と角突き牛との絆

菅 豊
（すが ゆたか）
東京大学東洋文化研究所助教授

二度と立つことがなかった角突き牛。その眼から流れる涙は赤かった

復活した角突き。勝負の分け際には、人牛一体となって入り乱れる

新潟県小千谷市東山地区。二〇〇四年一〇月二三日一七時五六分、マグニチュード六・八の大地震がこの地を襲った。多くの家屋と財産が失われ、尊い人命が奪われた。

この地には、古くより角突き（闘牛）が継承されている。それは国指定重要無形民俗文化財にもなっている。この地震で角突き牛の多くが被害を受けた。倒壊した牛舎の下敷きになって命を失った牛。救出されたものの、二度と立ち上がれなかった牛…。まさに家族同然に育てていた牛の死は、家族の死と変わらない悲しみをこの地の人びとにもたらした。

山奥の集落では緊急避難する際、牛を繋ぐ鼻綱を切って解き放した人もあったという。「せめて生き延びれば…」と願いながら、泣く泣く置き去りにしてきたのである。繋がれたままの牛もいた。牛もちたちは、避難所に入っても牛たちのことを忘れることはなかった。放っておけば地震にやられなくとも、数日中に飢えて死んでしまう。彼らは余震が続くなか、意を決して壊滅的打撃を受けた危険な山中に舞い戻り、命懸けで牛たちを救出。壊れなかった家畜市場を借りて、寝ずの番で牛たちの面倒を見て、厳寒大雪の一冬を越したのである。翌春、彼らは市の運動公園を借りて、仮設の闘牛場を自分たちの手でこしらえ、角突きを再開した。そして二〇〇六年、六月。ついに念願であった故郷・東山での角突きの復活を果たした。多くの人びとが被災地の東山から離村するなか、今、多くの牛もちたちが東山に戻りつつある。

角突きを続けるために、東山に戻る年寄りがいる。全壊した自分の家を再建する前に、牛舎の心配をする若者がいる。この地において、角突きは、人びとがそこで生き続けるための理由と原動力となっている。そして、それは紛れもなく残った人びとの結集の原点となっている。人びとを繋ぎ止める角突き。それは文化財としての価値以上の価値を、この山のなかで生み出しているのである。

援助の功罪

杉本 良男
（すぎもと よしお）
本館先端人類科学研究部

廃虚となった門前市あと（2005年2月インド、ウェーラーンガンニ大聖堂）

援助物資を求めて行列する（2005年1月インド、チェンナイ市）

二〇〇四年一二月二六日の朝に起こったスマトラ沖地震インド洋大津波は、震源に近いインドネシアだけでなくタイ、インド、スリランカなどに大きな被害をもたらし、その影響はインド洋を介して遠くアフリカ大陸にまでおよんだ。

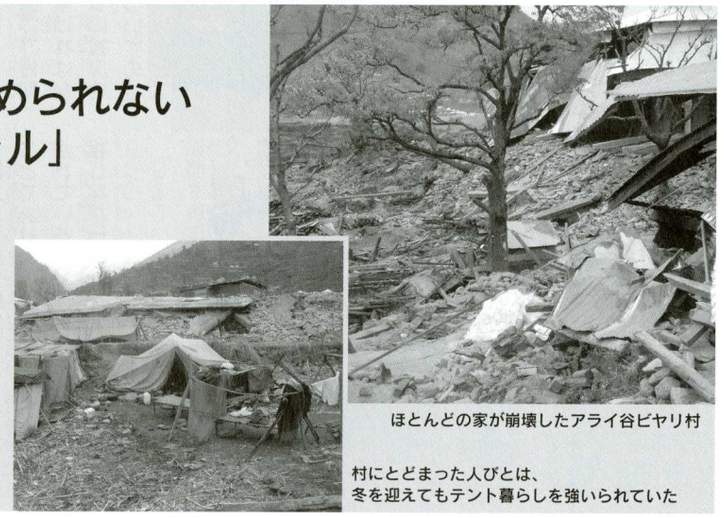
今回の地震・津波は、冬のリゾート地をおそい、欧米人、日本人などにも被害をもたらしたので、世界中から大きな関心の的になった。しかし、インド政府は、外国からの政府ベースの援助を断り、自力での復興をめざした。そのため世界からの援助の主体はNGO、NPOが担うことになった。そうはいっても、アメリカのUSAIDにしても、日本のジャパン・プラットフォームにしても、政府との緊密な関係のもとに運営されており、今回はとくに非・政府組織というよりは準・政府組織のような役割を果たしていた。

各国政府からの援助を断ったインドは、世界からのバッシングを受けた。あるインド人コラムニストは、アメリカとの軍事競争に破れたヨーロッパ諸国にとって、援助が次なる主戦場となっていたために、これを拒否したインドが袋叩きにあったのだと分析していた。インドの被災地にとって、物資も資金も不足していたわけでは決してなく、むしろ有り余っていたのが実情である。被災地では二、三日のあいだに電気や水などの基本的なインフラはほぼ復旧し、恐れられていた疫病もほぼ完全に押さえ込まれた。また、被災地には使われない古着が放置されていたり、援助物資がひそかに売買されたりしていた。援助の道が滞って難渋した人びとも多かったが、それはおもに政治的な理由によるものであった。

NGO、NPOは寄付を募っているために結果主義に走る傾向がある。その結果、現地のニーズと離れた「ほどこし」と自己満足の押し売りになる危険もはらんでいる。バッシングを受けたインドの例は、援助の功罪をあらためて考えさせる大きな試金石となったのである。

助けを求められない「グージャル」

子島 進
（ねじま すすむ）
東洋大学助教授



ほとんどの家が崩壊したアライ谷ビヤリ村

村にとどまった人びとは、冬を迎えてもテント暮らしを強いられていた

二〇〇五年一二月三〇日、わたしはパキスタン北西辺境州アライ谷を訪問した。インダス川沿いの幹線道路から脇道に入り、車で二時間の山中に位置するアライ谷は、一九七一年まで小さいながらも王国として存在していた。そのころまで「国家のなかの国家」は、スワートやディールなど国内各地に存在し、決してめずらしくはなかった。そして、この谷のビヤリ村には、プリンス・ムハンマド・ナワーズが住んでいる。彼の父が、この谷の支配者として君臨していた。今でもこの一族が、国家とアライ地方をつなぐ政治権力を独占している。プリンスが長年国会議員を務め、そのほかにも一族で州議会議員や町長的存在のナーズィムのポストを握っている。

七万人を超える死者を出した一〇月八日の大地震は、この谷にも多くの犠牲者や家屋倒壊をもたらした。特にビヤリの被害は甚大で、高台にある集落全体が崩落したかのようであった。プリンスやその一族の、立派であったろう邸宅も原形を留めておらず、テント生活を余儀なくされていた。そして、打ち続く余震や火山の噴火の噂が追い打ちをかけていた。さらなる被害を恐れた住民の多くは、インダス川岸に設置された大テント村に避難していた。この状況が新聞やテレビで繰り返し報道されたため、村のリーダー役が「援助漬け」と評するほどに、ここには援助（政府、国際機関、NGO）が集中していた。物資を満載したトラックに群がる人びとの姿は、先に訪れたカシミールの山村では、見たくても見ることのできない光景だった。

しかし、これらの物資は「ハーン」とよばれる地主階級が獲得し、ハーンのもとで小作人として働き、牧畜をおこなう「グージャル」には届いていないようだった。谷のより上部に暮らすグージャルのあいだの被害は、まともに調査さえされていなかった。二日間という短い滞在期間を、わたし自身もハーンの村で過ごしたわけだが、声をあげることのできないグージャルが、「援助漬け」の向こうに垣間見えた。

未来へひらく
ミュージアム

美術作家が見た美術館

美術作家とその作品を
評価する力をもつ美術館。
美術館の価値形成の作業を
検証するとき、
どのような意義が
あらわれるのだろうか。

白川 昌生（しらかわ よしお）
前橋文化服装専門学校教諭

価値を正統化する権威的場

今日の美術作家にとって美術館はどのようなものとして見えているのか考えてみたい。このことは逆に美術作家がその制度内でどういう位置をしめているかを浮きあがらせてくる。これまでの近代的制度のなかでは、美術館と美術作家はときに対立し、ときに共犯してゆく相関的関係を形成してきている。それは美術作品の価値を公的に承認し、正統化してゆく力学的場所――勝者、敗者をきめる政治アリーナの場所として美術館の役割が重要な位置をもっていることからも理解されるだろう。近代美術は美術史という自らを正統化する言説場を作り出すことによって、そのなかに自らを織り込んで自らの物語を普遍的なもの、正統的なものとして社会に提示する制度を再生産してきた。

このことはヨーロッパ近代美術の出発点で、ナポレオンが実践したように国家と美術、美術館、感性教育そしてナショナリズムの育成という国家的政治プロジェクトのなかで構築されてきたものであり、日本は明治以来そのシステムを定着させようとしてきた。また美術サロンと評論家、美術作家、画商をまとめあげる焦点のひとつとして美術館が大きく姿をあらわしたのも歴史的事実である。美術館はこのように美術価値を正統化、歴史化、社会化する権威的場として絶対的な力を作家に対してもっているのであり、その関係は非対照的なものである。

具体的には、美術館での展覧会に選ばれる作家がいるということは、選ばれなかった作家がいるということであり、その選別の基準は作家側ではなく美術館、学芸員側がもっているということである。今日のようなグローバルにして、国際的な美術館ネットワークができあがってきている状況では、国際展に選出される作家は、画廊→美術館→国際展というルートを一般的に通過してくる以上、そのルートから外れてしまっている作家にとって、公的な承認をえるチャンスは限りなくゼロになる。さらにそのことと美術作品をめぐる市場での作家、作品評価は深く連動しているため、ルートから外れている作家たちは、限りなく市場からも排除され続けてゆくことになる。ルートにのって成功をおさめた作家の多くは、今日、美術系大学の教員におさまっていることが多く、画廊、美術館、大学といった価値の再生産市場のなかに安定して存在し続け、権威となることが社会的な通例でもある。

さらに、作家をとりまいている美術市場――商業市場と象徴市場の両領域にわたって、排除された作家はほとんどそのいずれの市場からも排除されてゆく可能性が高くなり、市場に投入された作家は世代、流行での交代が生じるまでは両領域内で流通されていく力をもつことになる。このことが美術館ならびに研究者そして美術史に与えるあるいは与えられる影響は決定的なものとなる。この状況をコレクターやまた新しく市場に参入しようとする関係者、若い無名の作家たちは見ながら、追従する表現様式、作風、作品を選択してゆく流れが形成されるのである。

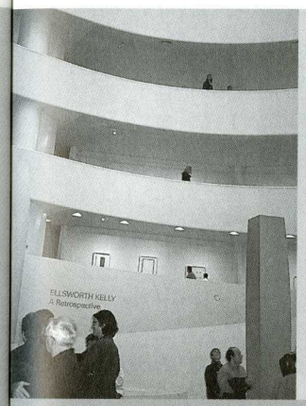
細部にわたって美術館の価値形成の作業を展覧会において見るならば、展示の仕方や他の作品との関係のつけ方等々からはじまり、カタログにおける言説、写真の扱いに到るまでその選別作業は浸透してゆくことになる。複数の画廊とも取り引き関係のある美術館では、扱う作家の傾向、関係画廊等々のつながりも無視はできないだろう。ミューゼアムショップに並べられるグッズ、書籍、カタログ等にもこの作業は無縁ではない。さらには二四時間アクセスできる美術館のホームページやリンクのネットワークは、この作業の効果においてさまざまな公衆、分野へ対し波動を引きおこす働きもして来る。

今日の作家はこのような情報システム市場のなかで流通、位置づけられていることを考えると、システムから排除されてしまっている作家たちへはサバイバルのチャンスはほとんどないに等しいともいえる。重層化、多層化しているネットワークを考えるとしてもマイナーな作家にはまたそれなりのフィールドが存在するが、それがメジャーなフィールドとリンクすることは限りなくゼロに近くなる。

アートによる浄財化

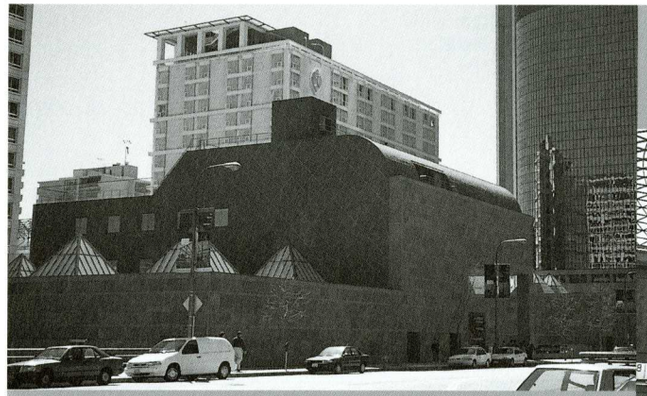
美術館は、そうした価値の再生産市場の一部を形成しているわけであり、また美術館は、特に、これから市場に参入するであろう潜在者、予備軍としての若い世代の人びとの欲望をかきたてる働きもしてゆくのである。格差社会、階層化社会のなかで芸術、スポーツ、芸能が多くの場合、生まれついた階層をとびこえて成功をおさめることのできる数少ない領域であることを考えると、美術館は未知の、未来の世代に対して欲望の再生産をうながす社会的装置として、あるいは教育装置として重要な位置をしめることは否定できない。

六〇年代の読売アンデパンダン展では反芸術的作品なるものが展示され、いずれもそれらは展示から排除させられたし、その経験をもとに美術館は新しい展示基準をきめることになった。ついこの数年前も横浜市美術館での展示で、身体障害者の自慰行為をとり入れた映像が展示中止にな



グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）

ルーブル美術館（パリ）

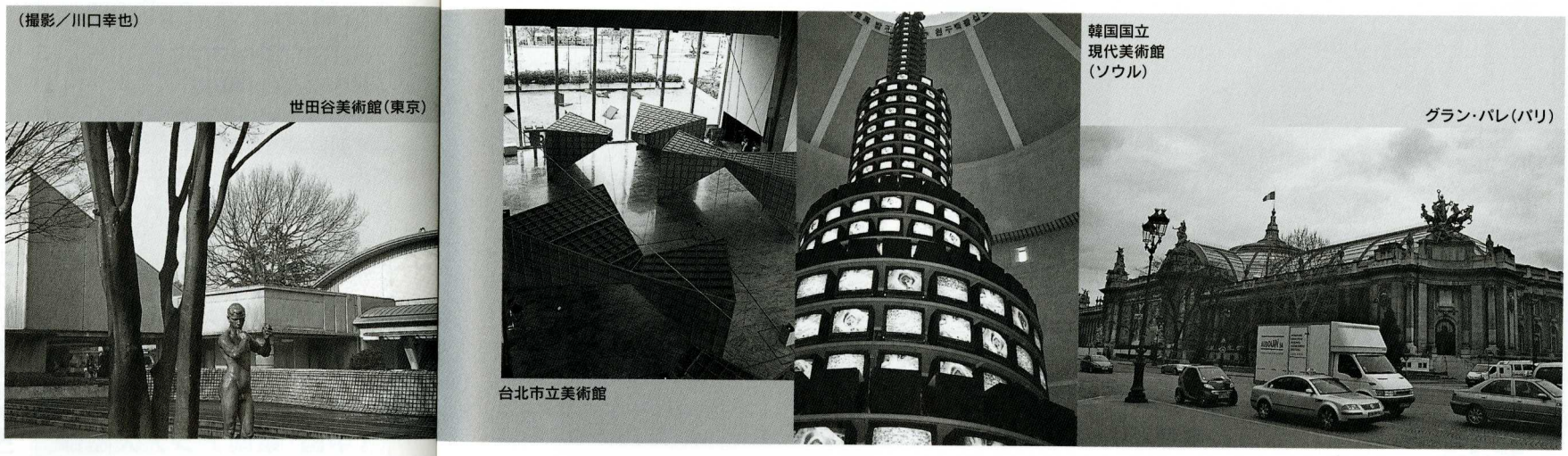

ロスアンジェルス現代美術館

大英博物館 グレートコート（ロンドン）

った。いつものことだが既成の枠組みに異議をとなえる作品を作家は作り出してくるのだが、最近は確信犯的に美術館の学芸員のなかにはそういう作用に共感し、あえて美術館の既成枠をくずしてゆこうという共犯的なことも生じているのかも知れない。

欧米の美術館では、すでにこのような異議申し立てや、社会的パラダイムの組み換え作業を美術館で展示してゆくことで、公衆へ対する社会的役割をはたしてきているのだが、日本ではバブル以降の長期的不況のなか、保守的傾向が強くなると同時に文化予算の縮小、美術館の法人化等の政策が進み、東京都美術館のような集客効果の高いものが注目され、美術館の格差もすすんできていることがあげられる。

反社会的なメッセージや、イメージを受けとめていく場が日本では縮小しているのではないだろうか。管理、利益効率だけが求められる社会では、いわば非経済的性質をもつ、ときに贈与的な、象徴的なものである芸術行為、作品は、大衆受けする商品にとってかわられてしまう。つまりルーブル展や大英博などの有名ブランド化される商品＝作品だけがマスメディアとの共犯のなか、流通し社会的認知をえることに突出してゆくばかりなのである。良しにつけ、悪しにつけ六本木ヒルズの美術館がそうであるように、階層化社会のステータスとシンボルとしてアートを独占しつつ、公衆へ公開してゆく権威の場として君臨することになる。M・ウェーバーの分析にしたがうとかつてのプロテスタントの人びとがアメリカでの経済的成功のなかに、浄財として文化活動をとり込んで自らの倫理性を職業とともに正当化したように、森ビルの経済的成功をアートによって浄財化してみせようという倫理的要求をそこに見るのは間違ってはいないだろう。



（撮影／川口幸也）

世田谷美術館（東京）

台北市立美術館

韓国国立
現代美術館
（ソウル）

グラン・パレ（パリ）

ホスピタリティ的な場

美術概念は歴史的、社会的なものであれば、時代、状況、地域、目的等々によってそれも変化してゆくはずである。概念の多様化を肯定する方向、考えは近代制度批判のなかから生まれてきたのだが、しかしながら美術館という場所は価値の正統化を公認する権力の行使の場所であることはかわっていないように見受けられる。近代美術全盛期ならば、こうした場が唯一絶対的に美術館に集中してしまっていたのだが、ポストモダンの今日ではむしろさまざまな価値、視点の提示、交換の場としての美術館という姿も出てきていることは、多くの作家にとっても喜ばしいことであるし、また観客のニーズと受容における多様化をうながすことも可能になる。

それにしても公的な美術館とその役割は以前にまして、先鋭的な部分への積極的な姿勢が求められるのであり、これはますます強くなってゆくと思われる。その理由は、価値の創造的アリーナとしての美術館がナショナリズムや国家の圧力から解放され、公衆、地域に結びついた共有の記憶を創造するためには、美術館は鋭敏なアンテナをはりめぐらし、多くのタイプの美術家との共働作業に入ってゆかなくてはならないからである。さらにこの共有の記憶は過去においていつも抑圧され、忘却させられてきた無意識的記憶をも引きあげ、それを「治療」する効果をもたらすはずである。

美術家が、わたしたちの奥深いところに沈み込んでいる不快のなかへ入り込み、それを浮上させ、治療する働きをするならば、これからは美術館は権威的な場であるのではなく、さまざまな公衆へのホスピタリティ的な場でもあらねばならない。

「ある文化において残存するのは、この文化のもっとも抑圧され、もっとも暗く、もっとも遠く、もっとも執拗なものである。ある意味で、もっとも死んでいるものである。・・・同様にもっとも生きているものである。というのは、もっとも動き、もっとも近く、もっとも欲動的だからである」

（『残存するイメージ』ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン　人文書院　竹内孝宏・水野千依訳　二〇〇五年）

この、もっとも死んで、もっとも生きているものを公衆に対して公開してゆき、投げかけてゆき、発掘、保存してゆく共働作業の場が、美術館に生まれてくるとき、美術家の役割、位置は単純に市場原理からのみ測られるものでないことが承認されてゆくはずである。

カラジャ人形

土人形　(標本番号H170216、高さ／44cm　幅／26cm　奥行／16cm)ブラジル

■

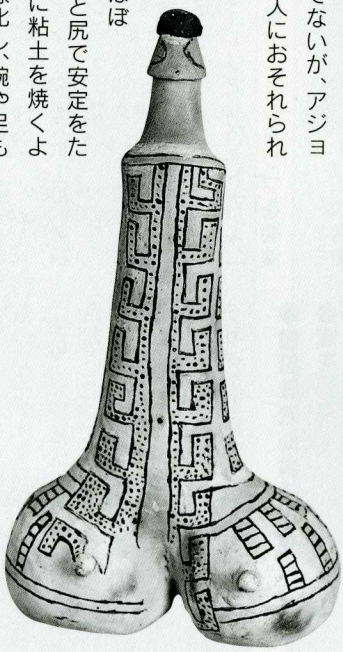
中牧 弘允　(なかまき ひろちか)
本館民族文化研究部

■

カラジャ人形はブラジル・アマゾンのアラグアイア川流域にすむカラジャ人の女性によって製作される。カラジャはマクロ・ジェ語族に属し、儀礼的に二分される集団―「大きな家」と「小さな家」―と、それを仲介する「中道」とよばれる集団によって構成されている。民博所蔵の人形には、こうした社会構造を反映し、二つの顔と四本の手をもつ球状の像が一体ある。

表紙の人形はアジョロマニとよばれる森に棲む妖怪をあらわしている。かつて村の男たちはアジョロマニの仮面をつけて、言うことをきかない子どもたちをおどしたという話がブラジルの専門書にのっていた。本資料の情報カードには、悪戯をした子どもたちはアジョロマニに連れていかれるとおどされるという記述がみられるが、まさにそれと符合する。しかし、森の穴のなかに棲み地震を起こすという情報カードの説明は、いろいろ文献にあたってみたが、検証することはできなかった。そのかわり、最近のこととして、ある呪術師がアジョロマニを見て、「毒」(植物を調合したもの)をもって追い払ったというくだりが先述の本にあった。地震についてはさだかでないが、アジョロマニは森の妖怪として村人におそれられた存在だった。

ところで、カラジャの土人形はかつて粘土を乾燥させただけで、前から見るとほぼ三角形であり、腕がなく、股と尻で安定をたもっていた。七〇年ほど前に粘土を焼くようになってから、形状も多様化し、腕や足もつき、動作も表現できるようになった。

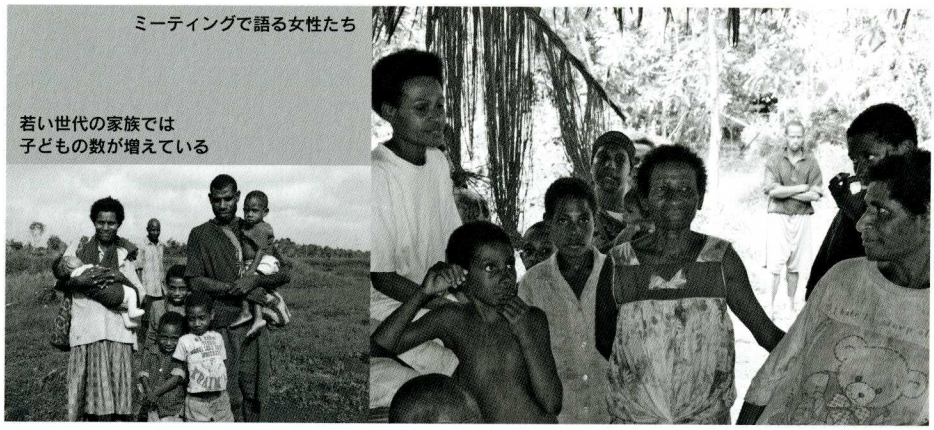


かつてはもっぱら女の子の玩具としてつくられた土人形が、焼き物となってからはカラジャ人形として、一般のブラジル人にも販売されるようになった。独特のボディ・ペインティングがほどこされ、妊娠や出産、狩猟や漁撈などのテーマ性もあり、ひろく民芸品として愛好されている。

万国津々浦々

変わらぬ村、変わる人びと

熊谷 圭知
（くまがい けいち）
お茶の水女子大学教授


ミーティングで語る女性たち

若い世代の家族では
子どもの数が増えている

自給自足の生活

パプアニューギニア北部を流れる大河セピック川、その南の支流域にあたるブラックウォーターが、わたしの二〇年来の調査地のひとつである。その名のとおり、泥炭湿地特有の黒く沈んだ水が特徴のこの地域には、広大な湖面に鳥たちが乱舞する、日本なら国立公園に指定されそうな風景が広がっている。

わたしがはじめてこのブラックウォーターを訪れたのは、一九八六年のこと。今年が七度目の訪問である。ブラックウォーターへの道のりは遠い。海岸の町ウェワクから、乗り合いトラックで、セピック川下流の町アンゴラムへ。そこから、モーターカヌーで一二時間かけ、二日がかりでたどり着く。

この二〇年で、村の暮らしは、どのように変わったのだろうか？村と村人の外見には、一見すると大きな変化はない。周囲の湿地林に生えるサゴヤシの澱粉（でんぷん）を採取して主食とし、湖で豊富に獲れる魚を副食とするという食生活はむかしのままである。雨季には、村中の土地が水没してしまうため、換金作物の栽培はできず、現金収入とよべるものはほとんどない。パプアニューギニアの村ではおなじみの、村人経営の食料品や雑貨を商う小さな店もここにはない。現金を使わない、自給自足の日常生活が維持されている。村にはカトリック教会が入っているが、全身に刃物で傷をつけ、その瘢痕（はんこん）がワニのウロコのように体を覆う、伝統的な男性の成人儀礼は残っている。精霊堂は、成人儀礼を受けた男たちだけの空間であり、女性や子どもはそこを避けてとおらなければならない。

祖先から続く悩み

大きく変わったのは、人口が増えたことだ。一九九三年には、二五〇人ほどだった村の人口は、今では、五〇〇人を超えている。これは、町からUターンする村人が増えたことに加え、子どもの数が多くなったことが大きな理由になっている。世帯調査をすると、年子に近い間隔で子どもが生まれている。年配の女性によれば、むかしは、子どもがことばを覚えて十分に自分一人の力で歩けるようになる三、四歳ごろまでは、夫は精霊堂で寝泊りし、性交渉は避けられていたものだという。

今回の滞在中に、村人といくつかのグループにわかれてミーティングをする機会をもった。驚いたのは「村の問題」は何かという問いに、若い母親たちが、公の場で堂々と自分たち女性の重労働が大きな問題だと語ったことだ。子どもの世話をしながら、森にサゴヤシを採りに行き、薪を集め、水を汲み、家族のために食事の支度をする、それがいかに大変な労働であるか…こうした語りは、村では、これまで聞くことができないものだった。

ある女性は、「わたしたちは祖先と同じ暮らしをし、祖先と同じ悩みを抱えている」と語った。その悩みとは、現金収入がなく、塩も、洗濯をする石鹸も、子どもに服を買う金もないことである。ここでは祖先の暮らしは、決して「伝統文化」として尊重されるものではない。

町から遠く、ガソリン代は高く、現金収入をえるために、サゴヤシや燻製（くんせい）の魚を町に売りに行きたくとも行けない。人びとの意識や価値観は変わっている、しかし村は変わることができない。その葛藤が、村人を覆っている。

人生は決まり文句で

コーラの実をもたらす者は、人生をもたらす

Onye wetara ọji, wetara ndụ

松本 尚之
（まつもと ひさし）

東北大学大学院専門研究員

コーラの実のもてなし

コーラの実はアフリカの熱帯雨林地域に植生するコーラノキの実で、わたしたちがよく知っているコーラ飲料の原料でもある。わたしがともに暮らしたナイジェリアのイボ人たちは、客を迎える際にコーラの実を供してもてなす。彼らの家を訪ねると、居間にとおされたあと、家の主人がコーラの実を皿に載せてもってくる。実をその場にいる人たちの数に割って食べるのだが、その手順には念入りな決まりがある。

まずコーラの実を載せた皿が、その場にいる男たちのあいだを年齢の若い者から順に廻されていく。年長者を敬うイボ人たちにとって、この過程は男たちが互いの年齢を確認する機会となっている。そしてみなのあいだを廻ったコーラの実は、最終的に最年長者のもとへとたどり着く。最年長者はコーラの実の入った皿を掲げ、みなを代表してコーラの実に対し祈りを捧げる。その後コーラの実が人数分に割られ、一人一人が実の一片を手にとり、口にする。

「コーラの実をもたらす者は、人生をもたらす・・・」これは祈りの冒頭によく用いられる文句である。イボ人たちにとってコーラの実は「友愛」や「歓待」を象徴する。コーラの実によるもてなしは家の主人と客が人生をわかち合うことを意味する重要な儀礼なのである。この儀礼は家で客を迎えるときだけでなく、集会や祭りなどの人が集まる機会にもおこなわれる。

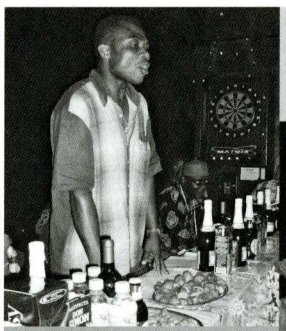
だから供されたコーラの実のかけらを受けとらないことは、大きな問題へと発展する。あるとき、わたしの滞在していた村で一人の男性が亡くなった。彼には三人の兄弟がいたが、仲が悪いことで有名だった。兄弟たちが通夜に訪れた際、そのうちの一人が故人の遺族が供したコーラの実のかけらを受けとらなかった。この出来事は村中に広まって、大きな話題となった。兄弟が故人の死の原因だという噂が広がり、村で緊急集会が開かれた。

贈り物やワイロとしてのコーラの実

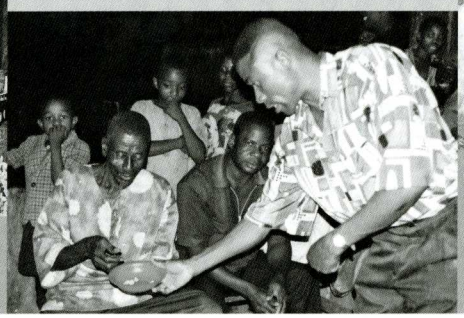
コーラの実は贈り物やワイロの隠喩（いんゆ）としても用いられる。久しぶりに村を訪れ、あちこち歩いていると、出会った人びとが寄ってきてわたしを歓迎してくれる。なかには「やあ、久しぶりだな。俺のコーラの実はどこだい？」と声をかけてくる人もいる。土産はないのかと聞いているのだ。土産がなければ、飲み物の一杯でも奢（おご）れればいい。だが懐具合によっては、それができない場合もある。初めのころは、そんな場合に何と答えればよいか悩んだものだ。しかしコーラの実にまつわるイボ人たちの習慣を知っていれば、それほど悩むことではない。

「コーラの実を供するのは家の主人かい？それとも訪ねてきた客かい？それは、主人の権利だろう。ここではわたしは客人だ。さあ、わたしのコーラの実はどこだい？」

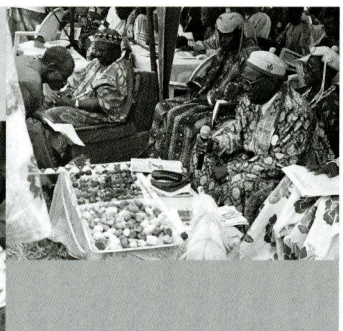
こういい返せば、なかにはにっこり笑って逆に飲み物を奢ってくれる人たちもいる。



東京在住のイボ人たちによる祭り。やはりコーラの実が供された



ナイジェリア・イモ州での祭りの席で。コーラの実に祈りを捧げる



コーラの実のもてなし。最年長者が最後に実のかけらをうけとる

外国人として生きる

日本に夢を託すマリ人

後藤 由佳（ごとう ゆか）
愛媛女子短期大学専任講師

二人の留学生

今日、京都で生活をしていると、ずいぶんと多くの外国人留学生を目にするようになった。JR東海道線の電車、京都市の地下鉄やバスの通勤通学時でも韓国語や中国語、英語を耳にする。それと同時に、アフリカからの留学生も全国で増えている。京都でもっとも多くの留学生が在籍する京都大学には今、エジプト、ケニア、スーダン、マリという一〇ヵ国からのアフリカ人が学んでいる。また、大分県別府市の立命館アジア太平洋大学では、ケニア、ガーナ、ウガンダ、マリという一四ヵ国のアフリカ人が学んでいる。

二〇〇六年四月、西アフリカのマリから来日した、京都大学大学院のサリフ・ジレさん。彼はマリで第一号の文部科学省「国費外国人留学生」である。国立マリ大学に在学した後、ベルギーの大学院で学び、NGOで働いた経験もある。ジレさんはマリの主要産業である農業、そのなかでもっとも多く、かつ輸出品目第二位の綿花に着目し、「マリにおける綿花産業の民営化過程における新しい市場競争的経済制度への小規模農民の適応」について研究をおこなっている。親戚もいない状態からの始まりだったが、国費の奨学金をえているため、経済的には恵まれており、日本でのアルバイト経験はない。三月までの一年間は、外国人留学生および外国人研究者の宿泊施設の寮で生活を送る。

一方、二〇〇〇年四月に来日し、この秋、私立の立命館アジア太平洋大学大学院を修了したサリフ・サコさん。彼の場合は日本の親戚を頼っての留学であった。私費留学のため六年八ヵ月間アルバイトや奨学金で生活を支え、勉学にとり組んだ。国立マリ大学を卒業後、日本の大学と大学院で学んできた。大学院では西アフリカと日本の関係について、開発経済学の視点から調査や研究を進めた。また、当時国際学生へのサポートが十分でなかった大学寮ではレジデント・アシスタントになり、階と棟の両方のリーダーを務め、大学院修了までの六年間は寮で生活を送ってきた。正課外活動の面では、地域の人とのふれ合い交流や、地域の活性化と国際化を促進する交流事業に積極的に参加し、アフリカ人の視点でアフリカ文化の普及にも力を入れてきた。来日以来、熱心に勉学にとり組み、特に日本語習得に積極的に励んだサコさんは、今では日本人顔負けの日本語能力を身につけている。

マリ人同士の固い絆

二〇〇四年は、日本には一万三一九人のアフリカ出身者が住んでおり、そのうちマリ人は一〇六人である。すでに生活の根を日本社会に下ろし、日本の大学卒業後は学業やビジネスで活躍しているマリ人も少なくない。日本名をもち日本国籍を取得した人もいる。グローバル化のなかで本国や故郷との結びつきを保てる安心感が、長期の滞在を支えてきた面もあるのだろう。

彼らは慣れない生活習慣や行動様式、ことばからくる不自由さや情報不足を補い合うため、また限られた余暇を仲間同士で過ごすため、週末には仲間の自宅やマリ料理のレストランを中心に集う。このようなパーティーが異郷での同国人同士の親交の場となり、マリ人の心の大きな支えとなっている。京都においても、少しずつ育ちつつある小さなマリ人コミュニティが、日本で暮らすマリ人を支えてきた。

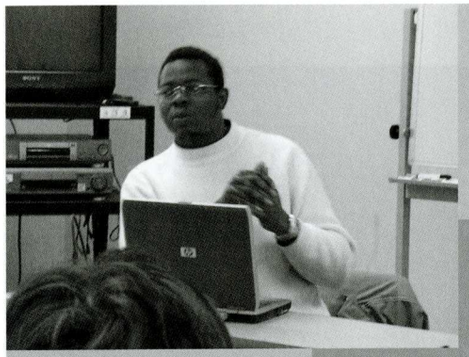
京都に来てまだ八ヵ月のジレさんにとって、より研究を深めるうえで、アフリカでもヨーロッパでもないアジア、なかでも古くからの伝統を受け継ぐ町、京都で色々な体験をすることは大きな意味をもっている。来日当初は、習慣やことばがまったく異なる日本で何もわからなかったため、自宅の夕食などに日本人の知人を誘っても断られて、一人で食べる食事に孤独感を味わうことも度々あった。しかし今ではマリ人の仲間のおかげで少しずつ人間関係も広がり、大学や近所に友人ができてきた。また大学での授業は外国人を対象とした日本語クラスが中心となっているため、クラス内で外国人同士の仲間ができ、留学生活において困ったことがあっても、その仲間に相談して乗り越えてきた。

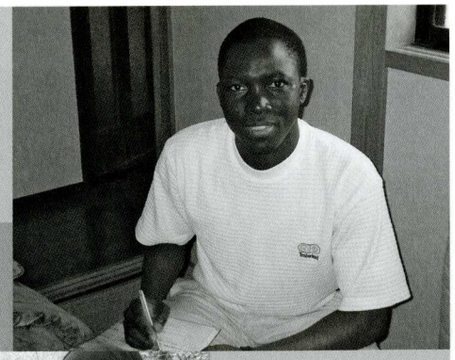
サコさんは、各国の文化が学べる所で大学生活を送りたいと願い、親戚のいる日本での留学を希望した。彼は来日前、日本人は頭が良いと思っていたという。しかし、日本の若者に接してみて何を考えているのか、また服装や髪型を見ても、何の目的であのような格好をしているのか戸惑うことも多い。また、留学生を一人の人間としてではなく、外国人としてしか接してもらえないことが多いようにも感じるという。例えば、日本語で尋ねているのにもかかわらず、日本人は慣れない英語で返答することがある。むしろ留学生にも日本人と同じように接してもらえれば、コミュニケーションが上手くいくと思うという。さらにこんな体験もあった。サコさんがスーパーマーケットで買い物をしていると、この人は何を買うのかなと思うのか、子どもやお年寄りがついてくる。サコさんをアメリカ人だと思い込み、最初は尊敬するようなまなざしを向けているが、ひとたび「アフリカ出身です」と名乗った途端、変な顔をされた経験もある。日本人はどうも欧米人以外は高く評価しない傾向があるように感じるという。このように日本人にはついていけないと感じる反面、異郷の地でのマリ人の親戚や友人との絆はかえがたいものである。病気やケガ、経済的な不安などの苦労はサコさんにもあったはずだ。しかし、これまでいつもマリ人の仲間が周りにいて、互いに支え合いなんとか切り抜けてきた。

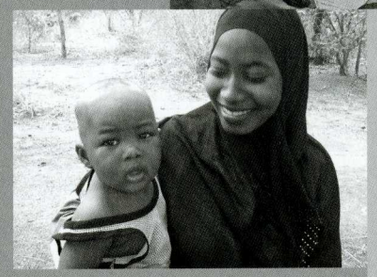
経験を生かして

年中暖かいマリ出身のジレさんにとって、京都の気候は寒すぎて決して生活しやすくないが、それでも人はまじめで親切でおとなしいと感じ、京都はお気に入りの町である。ジレさんは「日本の良いところは日本人には将来があるということだ」と言う。今、ジレさんが何より願っていることは、マリにいる妻や息子と京都で一緒に留学生活を送ることである。そして、大学院修了後は帰国して、日本で学んだことを生かしアフリカに役立てたいと願う。

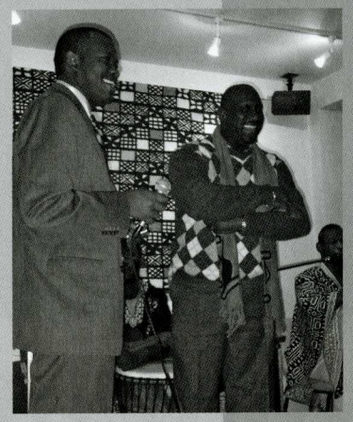
一方、アルバイトなどの社会経験をつんだサコさんは、将来は会社をおこし日本を拠点にアフリカとの橋渡し役として活躍ができればと意気込んでいる。日本人にはもっとアフリカについて知ってもらいたい。またアフリカ人にも日本についてもっと知ってもらいたいと願っている。


マリの文化講演をおこなうサコさん


仲間の自宅で
くつろぐジレさん


ジレさんの妻と息子

パーティーに集うマリ人



マリ料理のレストランでおこなわれた
アフリカの文化講演

マリ人のミュージシャンによるコンサート

地球を集める

レプリカで表現する

印東 道子
（いんとう みちこ）
本館民族社会研究部

企画展「ポリネシア文化の誕生と成熟」の入り口を飾るレプリカ

みんぱくに勤める考古学者として歯がゆい思いをすることがある。それは、研究対象とする資料を収集することができないことだ。発掘から出土する遺物にはときにはすばらしいものがある。わたしが研究しているオセアニアでは、エジプトや南米のような金製品はないが（もし見つかったら世紀の大発見だが、その可能性はまずない）、機能的なかたちをした釣り針や貝製の装身具類、そして独特な文様が施された土器片などがある。

これらの出土遺物は発見者のものにはならないし、購入することもできない。日本で研究する場合には、一年間の国外貸与許可をえてもち帰る。所有権はすべて現地政府にあるからだ。そのため、すばらしい出土品を博物館に展示したい場合は、レプリカを作ることになる。

発掘した土器を再現

レプリカでも十分に迫力のある場合がある。ラピタというポリネシア人の祖先が今から三二〇〇年前ごろに作っていた土器はまさにそのケースにあたる。ラピタ土器は、繊細な文様が施されて非常にもろいのが特徴である。そのため、遺跡から出土するラピタ土器は直径数センチメートルほどの小さな破片が大半だ。もとのかたちを復元することは非常に難しいし、破片を展示してもイメージはあまりふくらまない。

ところが、ニューカレドニアでラピタ土器のレプリカを作り始めた人がいると聞き、早速レプリカを二点注文し、その工程を記録するために二〇〇三年に現地へ飛んだ。製作者はニューカレドニア博物館の学芸員を長らく務めたジャン・ピエール・シオラ氏。氏はラピタ土器の文様に関する研究で修士号を取得した考古学者であり、アマチュアの陶芸家でもある。実際に氏が発掘した大きなラピタ土器片をもとに、大きさも文様もまったくそのままにレプリカを作って欲しいとお願いした。

シオラ氏が退職後に自宅に作った工房では、すでに土器がいくつかできていた。土器を作るには粘土をこねてかたちを作り、少々乾かしてから文様をつけ、さらに乾燥させてから火で焼く。今回はレプリカなので、まず、土器片をもとにして綿密な復元図面を作る。粘土は乾くと収縮するので、その収縮率を計算したうえでサイズを決めなくてはならない。土器のかたちやサイズはもちろんのこと、全体の文様も緻密に計算して描き込まれる。

ラピタ土器に愛着をもつシオラ氏は、市販されている人工粘土は使わない。あくまでニューカレドニアの粘土にこだわり、自宅そばで入手した粘土を庭に五年間うめて寝かせておいたものを使う。まず粘土を地面から掘り出して水に一週間つけたあと、五種類のサイズのふるいにかけて不純物をとりのぞく。

粘土だけでは作っているあいだに重みでかたちがゆがむために、砂を混ぜて強度を増す。ラピタ土器に使われていた粘土と海岸の砂（サンゴや貝の小片）の比（五対一）を忠実に守って、両者を混ぜ合わせて胎土を作る。

ここまでも大変な時間と労力であるが、さらに大変なのが文様つけだ。ラピタ土器の特徴は細かい幾何学文様を一ミリメートルにも満たない直径の点を連続させて表現するところにある。慎重に文様をつけてゆくかと思ったら、結構慣れた手つきでどんどん点線を連ねた線を描いていく。描くというか、先端に細かい突起をつけた道具を少しずつずらしながら粘土に押しつけてゆくのだ。文様の位置や順序を決めるのは難しいが、一旦はじめればリズミカルにつけてゆけるらしい。

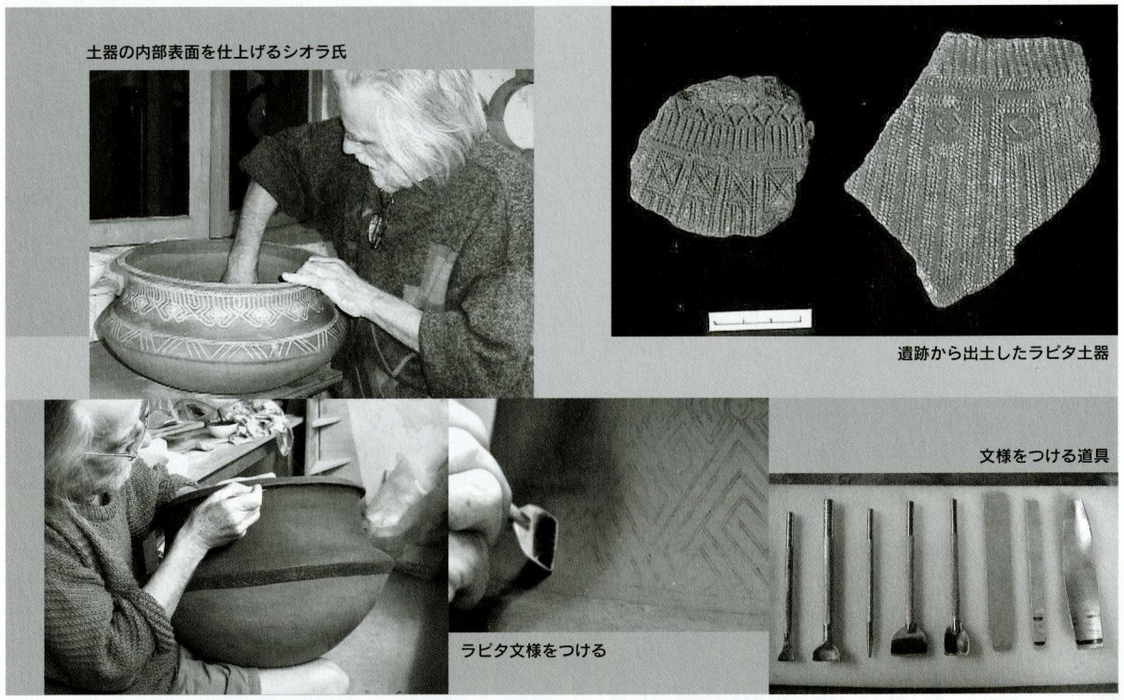
ラピタ土器を作った人びとが文様をつける道具として何を使ったのかはよくわかっていない。貝や竹、あるいはべっ甲などが考えられる。今回シオラ氏は金属の棒の先端が櫛（くし）状になった直線や弧状のものを何種類も作って使っていた。ここだけはこだわりのラピタ作りのなかの例外だった。

直径四五センチメートルの壺の文様つけには延べ六時間かかった。根気のいる作業である。それにしても、どこをとっても同じような間隔で直線や曲線が描かれているのは見事だ。

文様つけが終わると数日間乾燥させ、電気炉で焼成する。本来は縄文土器のように野焼きされたのだが、これだと壊れる確率が高いため、あえて冒険を犯さないことになった。それでも、いきなり高温に設定して焼くと、土器が割れてしまう。二時間かけて二〇〇度まで上げ、あとは毎時一〇〇度ずつ上昇させて六〇〇度まで上げたが、二時間たっても電気炉からはかなり水蒸気が出ていた。「まだ水分が多く含まれている」とブツブツ言っているのが聞こえたときには、思わず「割れないでくれ」と心のなかで祈った。一晩経って冷めるのをまってから炉のふたを開けるときが、もっともドキドキし、楽しい瞬間だ。

企画展を飾る

きれいな赤っぽい色に焼き上がった土器と対面したときには、この長い工程の最後に土器作りの人たちが味わう幸せがわかったような気がした。この土器はさらに文様が白く目立つように石灰がすり込まれて完成し、二〇〇四年に開催されたみんぱくの企画展「ポリネシア文化の誕生と成熟」の入り口を飾った。もはやホンモノの民族資料も収集しがたいことも多く、正確なデータに基づいたレプリカの存在も大切になっていくだろう。



土器の内部表面を仕上げるシオラ氏

遺跡から出土したラピタ土器

ラピタ文様をつける

文様をつける道具

生きもの博物誌
【バナナ／アフリカ・東南アジア】

バナナの食べ方

小松 かおり
（こまつ かおり）
静岡大学助教授

バナナは生で食べるものか

国際食糧農業機関（FAO）の統計で調べると、二〇〇五年の世界のバナナ（banana）の生産量は七二六四万トンでオレンジやリンゴより多いのだが、このほかにじつは隠れたバナナがある。プランテン（plantain）である。各国の統計では、料理用のバナナの一部をプランテンとして数えることがあるのだ。ちなみに、二〇〇五年のプランテンの生産量は三三五〇万トンである。

バナナを生でしか食べないのは、バナナを輸入している北の国だけで、生産する側の南の国では、ひとつの地域に一〇種類以上のバナナがあり、生食用、料理用、酒用と使いわけている。

アフリカ中央部、コンゴ共和国の熱帯雨林で調査をしていたとき、毎日の主食はバナナだった。料理用の品種は熟しても生では少しえぐみが残る。朝は熟しかけて甘くなった料理用バナナを茹でたり焼いたりした軽食が出てくる。昼や夜は、魚や野生動物の肉を煮込んだ辛いソースと、茹でて専用の叩き棒で叩いたバナナダンゴだ。熟する前の料理用バナナは、茹でると歯ごたえがあり、少し酸味のあるサツマイモのような味だ。

バナナ料理とはそういうものだと思っていたら、同じアフリカでもタンザニアの高地で調査をしていた友人は、バナナはインゲンマメと一緒に柔らかく茹でて食べるのが主食だという。しかも、バナナを発酵させて酒を作るという。

バナナから文化を追う

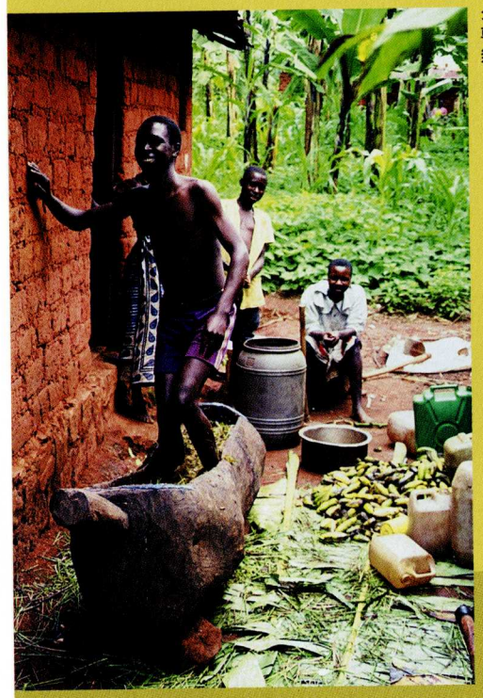
バナナはそもそも、東南アジアで栽培化されたと考えられていて、アフリカのあちこちで栽培されるようになったのは、紀元ごろまでにアラブなどを経由してもち込まれてからである。起源地の東南アジアでは、むかしは主食として利用されていたはずなのだが、現在は、主食はほとんどコメである。しかし、世界の湿潤熱帯のほとんどでバナナは栽培されていて、種類もたくさんあるという。それなら、起源地からアフリカまでバナナ栽培文化を追ってみれば、バナナをとおして各地の文化が見えるのではないか？と仲間と研究会を立ち上げ、各地のバナナを見て歩くことにした。

東南アジアでは街のあちこちに揚げバナナのスタンドがあって、軽食として食べられていた。花（雄花序）はスライスしてサラダの具になる。バナナの菓子がやけに発達しているところもあるし、種入りの料理用バナナを生のままスライスして、サラダの具にするところもあった。中国文化の影響を強く受けたベトナムでは、バナナの種を薬にしていた。バナナを栽培化した東南アジアでは、野生のバナナ（もちろん種入り）も種入りの栽培バナナもあるのだ。ベトナムでは、雄しべもモヤシのように麺の具になっていた。インドに行くと、バナナの茎（植物学的には葉柄）の髄をジャガイモのようにカレーの具にしていた。

食べるだけではなく、葉も、葉柄も、仮茎も利用される。宗教を問わず、供え物や儀礼に使われることも多い。バナナの不思議な形状と、たくさんの実が生る性質が、さまざまな意味づけを生みだすのだろう。バナナの世界をもっと覗きたい人は、「バナナの足」研究会のホームページをご覧いただきたい。
（http://www.geocities.jp/banana_rnj/）

東南アジアの街なら
どこでも見かける
揚げバナナの屋台
（塙狼星氏撮影）

ベトナムでは薬草が多いが、乾燥バナナや
バナナの種も薬として売られている
（北西功一氏撮影）



タンザニアの高地では、
専用品種のバナナを
発酵させて醸造酒を作る
（丸尾聡氏撮影）

カメルーンのバナナダンゴとソース。
コンゴでも同じ。ソースの材料は
川魚、ヤシ油、トウガラシと塩

バナナとインゲンマメを茹でた
タンザニアの高地の主食
（丸尾聡氏撮影）

バナナ（学名：*Musa spp.*）

バナナは、ムサ属に含まれる複数の植物から栽培化された。大多数の食用バナナは、ムサ・アクミナータとムサ・バルビシアーナという２種の２倍体か３倍体、もしくは２種間の交雑種である。アクミナータ系の２倍体（AA）のなかで突然変異によって種なしになったものがマレー半島周辺で栽培化され、これが広まって、バルビシアーナとの交雑種（AB、AAB、ABBなど）がインドやフィリピンで生まれたと考えられている。AAB、ABBは繊維質が多く、料理用に用いられることが多い。現在、日本など輸入国で食べられるのは圧倒的にアクミナータ３倍体（AAA）の１品種であるキャベンディッシュである。写真はカメルーンのプランテン・バナナの１品種。

フィールドで考える

「縁」のある建築

岩城 考信（いわき やすのぶ）
法政大学大学院工学研究科

大都会バンコクでの調査の難しさ

建築学の調査手法のひとつに実際に建物を測量して、図面化する実測調査がある。実測調査においてもっとも重要なことは、家主や店子からいかにして建物の測量の許可をいただくか、ということだ。測量には少なくとも数時間かかるし、建物の規模によっては数日を要するものもある。だから、商店がひしめき合うバンコクのチャイナタウンでは、なかなか測量の許可は思いどおりにいかない。忙しく店を切り盛りする商店の家主や店子に納得していただかないといけないからだ。

それでも、いくつかの建物を測量することができた。そのなかに華僑によって一九三〇年代半ばに開発された邸宅、店屋、長屋という多様な機能を複合した建物がある。五年前からこの建物を測量したいと思ってきたのだが、当時、家主は郊外に転出しており、連絡のとり方もわからず、近くを訪れるたびに外観を眺め、この建物とは「縁」がなかったと諦めていた。ところが二〇〇六年七月、近所を友人と歩いていると、無人のはずの邸宅が改修されていて、なかから若い男性が出て来た。すかさず、「この建物の家主ですか」と問いかけると、彼は「そうだよ。この建物に興味があるの、なかに入りたい？」と聞き返してきた。わたしは「入りたい」と即答し、恐る恐るこの建物を測量したい旨を伝えた。すると彼は「いいよ。ただ、家族に相談してみないと。それと調査は土日にしてくれないか、平日は忙しいから」と答えてくれた。後日、彼の家族の許可と三人の友人の協力を経て、三日間におよぶ実測調査が無事に終了した。

語り部を探して

ただ測量が終われば調査が終わりとはならない。というのもこの建物だけでは、建設年代や開発者の来歴についてよくわからなかったからだ。数年前に建物を購入した現在の家主は、むかしの家主の来歴についてほとんど知らず、また長屋に住む店子は新しい大家に気をつかっているのか、単純に古い大家について知らないのか、みな一様に「古いことはわからない」と答える。そこで近所に住む古老や物知りを探す。

建設年代は、建物の建材や構法と人びとの語りからおおよその判断がつく。近所に住むおばさんが「この建物の開発者はキム・チャイハという華僑だよ」と語ってくれた。ただし「キム・チャイハ」は中国語（潮州方言）をタイ語で音声表記したもので、やはり今後資料から彼の来歴を知るためにも漢字で知りたい。華僑も二世、三世になると家庭内で中国語を話し、自分の漢名ぐらいは書くことはできても、教育はタイ語で受けてきた人びとが多いためその他の語彙を漢字で筆記できない。親切なおばさんは隣に住む古老の家のドアを叩き、わたしを紹介した。古老は「キム・チャイハは、金財合と書くのだ」とわたしの野帳に力強く書き記してくれた。古老はキム・チャイハの事業について、「タイや中国の土産を扱う貿易商」という興味深い話も聞かせてくれた。新しい疑問が湧いた。彼の商店や事務所は、どこにあったのだろう。職住が隣接していたか否かは商業地の空間を考えるうえで重要なテーマである。しかし、この問いに答えられる人を建物の周りで見つけることはできなかった。

タイ語で書いてくれないか？

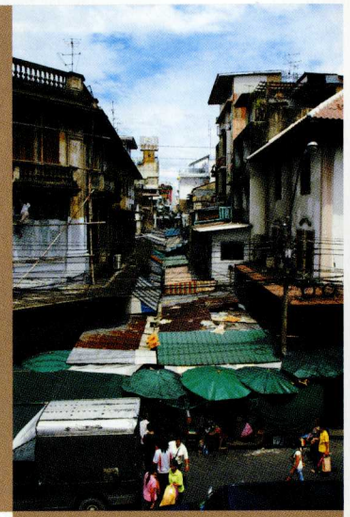
数週間が過ぎ、近くの中国廟を訪れる所用があった。前夜、心ない人によって廟の看板が盗まれたそうで、中年の兄弟が「あんなものを盗んで何に使うのだろう」と愚痴をこぼしながら、新しい看板に金字で廟の名前を書いていた。といっても彼らは漢字が書けるわけではなく、廟内に残された別の看板を模して書いているのだという。廟を管理する人たちとあって、地域の歴史に明るく話好きだ。特に期待もせずに話のつなぎとして「キム・チャイハを知っていますか」と聞いてみた。すると「知っているよ。彼はソンワート通りに店を構えていた」との返事が返ってきた。ソンワート通りというのは、二〇世紀初頭に開発されて以来、チャイナタウンでも特に貿易商を中心とする大店が集まった通りとして知られている。詳しく話を聞くと彼は、キム・チャイハの開発した建物の近所に住んでいるということで、子どものころに父親がキム・チャイハについて語ったことを今も覚えていたのだ。少しずつ開発者についてわかり始めた。件の建物との「縁」を感じた。

一頻り雑談をした後、廟を出ようとすると、別れ際におじさんは「論文を書いたら、ぜひ一部を譲って欲しい」とわたしにいった。どうもこの地域の詳細な歴史を紹介した本はないようだ。そして「日本語も英語も中国語も読めないので、タイ語で書いてくれないか」と付け加えた。

研究者としてわたしは、一方的に人やモノから情報をもらってきた。受けた代わりに、いつか地域の人びとに還元しなくてはならない。廟のおじさんのことばは、研究者として忘れてはいけないことを改めて強くわたしに意識させた。

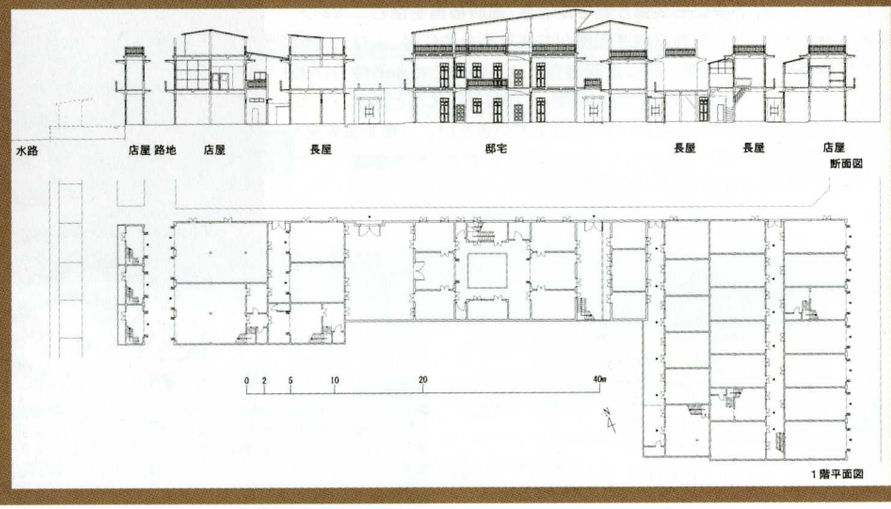
幅員の広い路地で遊ぶ子どもたち

キム・チャイハが開発した長屋の路地



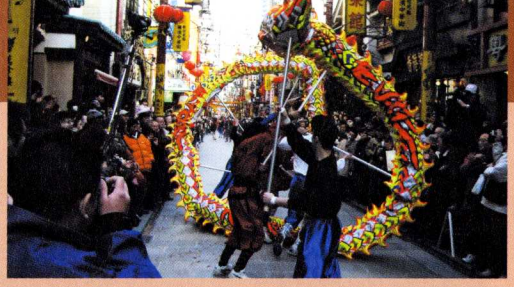
チャイナタウンのサンペン通り

調査の様子
（実際に建物を指差して説明してもらう）



キム・チャイハが開発した建物
（筆者測量）

開館三十周年記念事業



毎日新聞夕刊連載コラム
「異文化を学ぶ」をもっと学ぼう！

●みんぱく公開講演会
「日本で暮らす―移民の知恵と活力」

日本のまちで、外国から来た人びとの存在はたいへん身近になりました。わたしたちはマスメディアを通して世界の情報を知りますが、日常生活では、彼らを通して世界とつながっているともいえます。彼らの活力に満ちた生活を紹介します。日本に暮らす外国の人びとからみたら、日本のまちがどう見えるか、考えてみましょう。

講演者：南 真木人（民族社会研究部助教授）
「ネパール人労働者の素顔」
陳 天璽（先端人類科学研究部助教授）
「チャイナタウン―変容とバイタリティー」
司　会：庄司 博史（民族社会研究部教授）

日　時：3月2日（金）18:30～20:30（開場17:30）
場　所：オーバルホール
大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞ビルB1
定　員：400名（参加無料）
主　催：国立民族学博物館／毎日新聞社

【申込方法】「3月2日講演会参加希望」と明記のうえ、1）郵便番号、2）住所、3）氏名、4）連絡先電話番号を記載し、ハガキ、FAX、メールにてお申し込みください。2名様以上でお申し込みの場合は、それぞれの1）～4）を必ず明記してください。なお、応募者が多数の場合はご参加いただけない場合もあります。2月中旬に参加証を発送する予定にしております。当日は手話通訳もございます。
※参加申し込みをいただいた方の個人情報は、参加証の発送、および次回以降の講演会の案内のみに使用いたします。

【宛　先】〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
FAX 06-6878-8479　メールアドレスkoenkai@idc.minpaku.ac.jp

【問合せ先】国立民族学博物館 研究協力課研究協力係
TEL 06-6878-8209

編集後記

残念ながら紙面の都合上、「フィールドで考える」欄の家屋の実測図をあれ以上大きく掲載できなかったが、近年の民族学・文化人類学では、ああいうモノの記述より、事象の分析への関心の方が高い。多くの文化人類学者は、日常的な慣習や行為が意識的、無意識的に繰り返されるメカニズム、またそこから変化がどのように生じるのかに関心を寄せている。わたしの解釈では、今回の特集「災害」も、その応用問題だ。つまり、突然にして社会の枠組みが崩れ、それまで自明であったはずの日常の秩序が脅かされたとき、われわれがどのように新しい日常を作り直すのか。そのとき各人の身についた「文化」がどのように立ち回り、あるいはどのように文化が刷新されるのか。こういった関心が根底にある。

これも私見だが、不幸にも災害が起きたとき、風評被害を含む二次的人災を最小限に食い止め、早急な秩序回復がなされるためには、人びとが自分たちの地域や歴史に自信と誇りと愛着をもっていることも条件のひとつではないか。ともあれ、せめて自分の学問が、「縁」深い人びとのどういった部分に貢献できるのか、自覚して研究を深めていきたい。（樫永真佐夫）

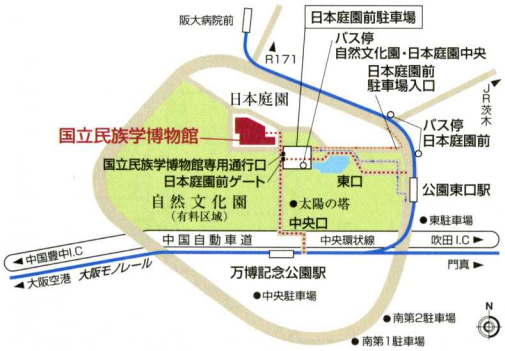
月刊みんぱく

次号予告／3月号特集
ツーリズム

2007年2月号　第31巻第2号通巻第353号
2007年2月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151
発行人　朝倉敏夫
編集委員　池谷和信（編集長）　樫永真佐夫
川口幸也　庄司博史　山中由里子
協力　財団法人 千里文化財団
制作　株式会社博報堂
製版・印刷　アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます



交通案内
■大阪・千里万博記念公園内　●大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。　●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分（茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。　●自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。　●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。